平成３０年度第１回京都市総合教育会議 会議録

１　日　　時　　平成３０年７月１９日　木曜日
開会　１０時００分　　閉会　１１時３０分

２　場　　所　　京都市役所　３階　第一応接室

３　出 席 者

京都市長	門川　大作
京都市教育長	在田　正秀
京都市教育委員会委員	奥野　史子
京都市教育委員会委員	鈴木　晶子
京都市教育委員会委員	星川　茂一
京都市教育委員会委員	髙乘　秀明
京都市教育委員会委員	笹岡　隆甫

４　関係者等

京都市副市長	村上　圭子
京都市総合企画局長	藤原　正行
京都市子ども若者はぐくみ局長	久保　敦
京都市教育委員会教育次長	稲田　新吾
京都市教育委員会教育企画監	清水　稔之
京都市教育委員会総合教育センター所長・指導部長	佐藤　卓也

（※ 出席者のうち，局長級のみ記載。）

５　傍 聴 者　　０人

６　議事の概要

（１）開会

１０時００分，門川市長が開会を宣告。

【門川 市長】

教育委員会においては，在田教育長や教育委員の先生方を先頭に，「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という本市の教育理念のもと，学校現場・地域と一丸となり，京都の子どもたちの教育，幅広い市民の皆様の生涯学習に御尽力をいただいていることに敬意を表したい。

６月に発生した大阪北部地震，そして７月の西日本豪雨，さらにこの夏の猛暑等におけ

る休校や避難所の開設等の対応も的確に判断していただいた。他都市のご縁のある方が，「京都市の教育委員会の判断は非常に迅速かつ的確である。自分の地域でのモデルになっている」という旨をおっしゃっていた。また，本市でも多くの避難所が開設される中，ある国会議員から「避難所に伺った際に，地域の方が自主的に動いておられ，京都ならではの地域力を感じられた」と聞いた。これを継承し，安心安全な学校教育・まちづくりに邁進していかなくてはならないと決意を新たにしている。

本年度１回目の総合教育会議のテーマは，「新学習指導要領の更に先を見据え，京都の子どもたちにつけたい真の力」とさせていただいた。新学習指導要領については，今年度から幼稚園で全面実施，小中学校では先行実施している。私自身も中教審の教育課程企画特別部会に委員として参画させていただき，本市の実践を踏まえた提言をしてきたが，この１０年，２０年，京都市の学校現場と教育委員会が高い専門性と情熱を込めて取り組んできたことが，全国のモデルとして展開されてきているといっても過言ではない。

そして，本日のテーマが「その更に先を見据えていこう」ということで心強いものを感じている。新学習指導要領が想定している２０３０年の社会は，ＡＩの進化や少子化，グローバル化の進展などにより，大きく変わっていると想定される。２０３０年の社会とその先も踏まえ，これから「京都の強み」をいかして，どのように「子どもたちの学びと育ち」や「魅力ある学校づくり」を進めるのかの議論を行いたい。

今年は明治維新１５０年，市役所開庁１２０年，世界文化自由都市宣言４０周年という節目の年にあたる。さらに来年は，日本で最初の学校が発足して１５０年という節目の年である。文化庁の京都への全面的移転決定を契機とし，国が文化を中心にして施策を充実させていく方向性を示している中で，学校教育・生涯学習との接点も増やしていくべきだと考えている。本日は，忌憚なく意見交換し，将来への展望を共有したいと思っているので，よろしくお願いしたい。

（２）意見交換

【事務局】

意見交換を行うにあたり，教育委員会事務局　佐藤総合教育センター所長・指導部長から説明させていただく。

【教育委員会事務局　佐藤 総合教育センター所長・指導部長】

それでは，先ほど門川市長からの御挨拶にもあった本会議のテーマ等を踏まえ，これまでの本市の教育実践，また，そうした取組が反映された新学習指導要領の理念や，新学習指導要領が想定する社会像について，資料に基づき説明させていただく。

まず，全国の先導的役割を果たしてきた京都市の教育実践について申し上げる。

資料３の右下のシート番号３を御覧いただきたい。本市では，教育振興計画に位置付け

ている「はばたけ未来へ！京（みやこ）プラン」における喫緊の課題を年度ごとに示す「学校教育の重点」を毎年，教育委員会で議論し，議決をいただいている。そして，その中で，京都市の学校教育が目指す子ども像として「伝統と文化を受け継ぎ，次代と自らの未来を切り拓く子ども」を掲げ，子どもたちの学びと育ちに向けた取組を進めている。

シート４にあるように，今年は，明治１５０年，本市の自治１２０年，来年は，番組小学校１５０周年と，先人の志と行動を再確認し今と未来に生かしていくために，大きな節目を迎えている。

そうした中，シート５，６の通り，これまで京都のまちが培ってきた「地域の子どもは地域で育てる」という理念の下で，全国に先駆けて取り組んできた本市の教育実践は，新しい学習指導要領の理念に結実している。

その教育実践のポイントは３点あり，シートの８－１０にも詳細な取組を記載しているが，１つ目は，「『参観』から『参画』へ」というキーワードで「開かれた学校づくり」を進めてきたことである。全国をリードしてきた京都方式の学校運営協議会の取組や学校教育への多くの市民ボランティアの参画による教育活動の推進を記載している。シート９だが，２つ目は「徹底した現場主義と学校裁量の拡大の取組」としての校長の人事権や予算執行の裁量拡大，徹底した現場主義と学校裁量の拡大を進めてきたことである。シート１０だが，３つ目は，教員の不断の努力と教育実践による教育の質の向上の取組として，京都市独自の指導計画である京都市スタンダードの策定や全教員の週間指導計画の策定，自主的な研修会活動の推進を進めてきたことである。この３つの京都の教育実践が，新学習指導要領の理念である「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラムマネジメント」として，全国で実践されようとしている。同時に，こういった実践を展開できることが本市教育の強みであると考えている。

それでは，シート１１を御覧いただきたい。新学習指導要領においては，現在よりもより一層の少子化や高齢化が進み，更に，ＡＩ技術の発展した「２０３０年の社会」が想定されている。

シート１２では，２０３０年の社会に向け，我が国が目指す方向性や京都市が目指す方向性として，３つのキーワードを挙げている。１つ目はＡＩの進化による「ソサエティ５．０」，２つ目が持続可能な社会を実現するための「レジリエント・シティ」と「ＳＤＧｓ」，そして，３つ目が人生１００年時代における「働き方改革」と「健康長寿のまちづくり」である。

まず，「ソサエティ５．０」について，シート１３ページを御覧いただきたい。この概念は，狩猟社会や農耕社会，工業社会，情報社会に続く，我が国が目指すべき未来社会の姿として，平成２８年１月に閣議決定された第５期科学技術基本計画で初めて提唱されたものである。これまでの情報社会が抱えていた「知識や情報が共有されず，分野横断的な連携が不十分である」という問題は，「ソサエティ５．０」が目指す社会では，ＩｏＴで全ての人とモノがつながり，様々な知識や情報が共有され，今までにない新たな価値を生み出

すことで克服される，と謳われている。具体的には，人工知能により，必要な情報が必要な時に提供されるようになり，ロボットや自動走行車などの技術で，少子高齢化，地方の過疎化，貧富の格差などの課題の克服も視野に入れており，社会の変革を通じて，これまでの閉塞感を打破し，希望の持てる社会，世代を超えて互いに尊重し合あえる社会，一人一人が快適で活躍できる社会を目指すものである。

シート１４を御覧いただきたい。本市は，平成２８年度にロックフェラー財団から，持続可能な社会の実現に向け，ショックやストレスなどに備え，可能な限り早急に復旧し，強靭になっていく社会を目指すレジリエント・シティとして，世界の１００都市の中の一つとして選定された。そして，昨年１０月にはディスカバリーエリアを選定するなど，取組を進めているところである。また，こうしたレジリエント・シティの考え方は，「ＳＤＧｓ」，すなわち「持続可能な開発目標」の理念・趣旨とも共通しており，本市では，この両者を融合し，相乗効果を高めながら取り組むこととしているところである。こうした本市の取組も踏まえ，これからの本市学校教育の中でも，子どもたちが，ひとごとではなく「みんなごと，じぶんごと」として，持続可能な社会づくりについて考え，行動できる力を身につけさせていくのも重要だと考えている。

そして３つ目として掲げた，人生１００年時代における「働き方改革」，「健康長寿のまちづくり」に向けてである。シート１５を御覧いただきたい。これからの時代を生きる子どもたちはもとより，現役の教職員自身が，いきいきと働き，子どもと向き合うことのできる学校現場を作っていくことは，教育にとっても最も大切な，「人」が輝くことであり，子どもたちのための魅力ある学校であるために欠かせない要素だと考えている。優れた教育活動を進めていただいている教職員の方々は本市教育の大きな強みであり，そのうえで，シート１６のとおり，京都市では様々な観点から働き方改革を推進しているところである。２０３０年の社会とその先を見据え，教職員も輝く学校づくりに向けて，どういった取組が必要なのかを今後考えていかなければならない。

シート１７，１８を御覧いただきたい。ただいま御説明申し上げたとおり，目指す方向性に向け，学校教育で何ができるのか，子どもたちにどういった力を身につけさせるのか，を考えるとき，改めて「京都の強みを生かす」という視点から考えることが大切だと考えている。

シート１９では京都の都市特性を記載しつつ，シート２０では，今，実際に本市の学校教育の中で取り組まれている，地域や歴史，文化を生かした取組についても記載しており，これまでの取組の更なる充実・発展の先に，京都で学ぶ子どもたちだからこそ，身につけることができる力のヒントやきっかけがあると考えている。

現在の取組についての説明は以上である。

【在田　教育長】

まず，今回の意見交換のテーマを「新しい学習指導要領のさらに先を見据えた子どもた

ちにつけたい真の力」とさせていただいた。新しい学習指導要領は，２０３０年という時代を見据えて，子どもたちをどう育むのかということを理念，テーマとして改訂されている。これまでの学習指導要領では，「何を学ぶのか」に重点が置かれていたが，新しい学習指導要領では，「何ができるようになるのか」という目標を見定めて，そのために「どのように学ぶのか」に重点が置かれている。そうした背景がある中，ＡＩの飛躍的な進歩により，現在の小学生が大人になるころには６５％は今存在しない職業に就いていると言われている。そういった時代に，これからの子どもたちに求められるものは，「クリエイティビティ，創造性」と「マネージメント，経営管理」そして「ホスピタリティ，おもてなし」の３つの分野を重視して子どもたちの能力を育成していかなければならないのではないかという意見がある。そうした中で，本日は議論の切り口として，「京都の文化力と教育」，「グローバル化，ＡＩ時代に新たに価値を生み出す真の想像力・人間力」，「働き方改革のその先へ」の３つとしているが，１つ目と２つ目は関わる部分もあるため，この２つについて皆様方の御意見をいただきたい。まず，教育委員の先生方から御意見をいただき，市長の御意見をいただくという順で議論を進めさせていただくので，よろしくお願いしたい。

【笹岡 教育委員】

先日，文化庁京都移転・私たちができること推進チーム会議でも話をしたが，京都は京都の強みを生かした教育をしっかり実践されている貴重なまちだと思う。京都の学校では伝統文化の体験など文化が教育現場にしっかり根付いていて，非常に素敵なことだが，ただ，１学年だけ，もしくは１クラスだけの実施に留まるなど，全ての子どもたちが体験をしているわけではない。私は，京都市芸術文化協会主催の「ようこそアーティスト文化芸術とくべつ授業」や文化庁の「伝統文化親子教室」，また農林水産省の花育などで，学校現場に行き，いけばなの体験活動を行っている。できれば全ての子どもたちが伝統文化に触れられるようなきっかけを，文化庁と京都市が一緒になって作ることができれば嬉しいと思っている。いけばなだけではなく，どんな伝統文化事業においても，それをたった１回でもいいから全ての子どもたちが経験することで，これからの子どもたちに豊かさをもたらすことができるのではないかと思っている。最近，京都に LINE や Panasonic など最先端の企業も事業所を開設するなど，多様な企業が集積されている。そうした中，子どもたちが「仕事」をもっと身近に感じるようなきっかけを作れればと思う。京都市では，生き方探究館が実施する「生き方探究・チャレンジ体験」で子どもたちが仕事に触れる機会がたくさんあるが，これをどう還元するかというのがこれからの課題だと思う。狭義の学力よりも生きる力が必要な現代において，子どもたちがどう考えて，どういう様な大人を夢見ていくのか，ということを学校現場が紹介する取組の充実を図るべきだと考える。

【髙乘 教育委員】

私が親しくさせていただいている刺繍の職人の方がおられる。以前に山鉾の懸想品に使

われる水引の刺繍を担当されたことがあったそうで，これまで使われていた作品や，江戸時代にどういう職人が作業をしていたのか全部丁寧に見ながら，水引を作られるそうである。そうした時に，１００年後・２００年後に，今作成しているこの水引が修理・新調されるときは，２００年後の職人さんも自分がしたように，きっと今の作業を調べられると考え，２００年後の職人さんに恥じることのないような，彼らに誇れるような平成の職人がいたということを分かってもらえるよう仕事をしたいとおっしゃっていた。これを聞いて，この職人さんは２００年くらい先のことを考えて仕事をしているのだと改めて感心させられた。その方は茶道も非常に楽しんでいて，日常の中でお茶を楽しむ生活をされている。また，和装の物入れをお持ちで，ご自身でデザインされ，ご近所の方にも贈っていると聞いた。京都の魅力というのはそういう方がごく身近にいること。文化といえば特別で，敷居が高いイメージがある一方で，京都の町の魅力は，生活のそこかしこにお茶を楽しんだり，お花を楽しんだり，仕事ではないけど趣味として小物を作ったりして楽しんでおられる方がいること。先程，笹岡委員も，子どもたちに伝統文化体験活動の一層の充実をとおっしゃっていたが，きっと，刺繍の職人の方も小さい頃から特別にお稽古に通われたわけではなく，日常の生活の中で自然とお茶やお花を身につけられたと思う。子どもたちに，生活の中で受け継がれてきた文化というものを継承していくことが重要であると感じている。

【在田 教育長】

京都市立芸術大学の鷲田学長が「職人さんというのは１００年・２００年先をみて，その時代の人間に自分の仕事がどう思われるのかという事をかなり意識しながら仕事される」とおっしゃっていたが，そういう心意気が京都のまちの色々なところに息づいていることを子どもたちが実感できることが非常に大事ではないかと，先生の御意見を聞いて感じた。

【門川 市長】

着物に刺繍をされている方がおっしゃるには，「若い頃は，手に職さえあれば暮らしが楽になると親に言われていた。それから５０年間やってきたが，生活がとても厳しい」とのこと。他にも，仕事がないためアルバイトをしている職人もおられると聞いた。伝統産業にとって，非常に厳しい社会状況が続いている。

文化庁が京都に移転されるにあたり，重要なことが２つあると思っている。その１つは文部科学省や文化庁だけでなく，国が省庁のあらゆる政策において文化を基軸にして進めていくということである。住宅行政は国土交通省，観光行政は観光庁，あるいは衣食住の衣の部分は経済産業省，食の部分は農林水産省といったように各省庁の管轄はあるが，あらゆることに文化で魂を入れる，背骨を入れるということが重要。もう１つは，日本人が大事にしてきた衣食住・地域の絆・自然との共生などの生活文化を再認識することである。

子どもに茶道やいけばな体験をしてもらうことは大事で，一昔前は，そういったことが家庭でできたが，現在はだんだんできなくなってきている。そこで，京都では全ての学校で発達段階に応じて子どもたちが何らかの伝統文化体験ができるよう取り組んでいる。生活文化をどう育むかを考え，実践することが大切である。私が教育委員会に在籍していたときに参加した管理職対象の研修で，多くの先生が縦結びで浴衣の帯がしめられなかった。今なら地域に伝統文化を身に付けた方がたくさんいる。今のうちに何ができるのかを考えていくべきである。

宿泊税の徴収が１０月からスタートするが，宿泊・観光客にとっても，市民にとってもより良い街を目指すため，使途に「住む人にも訪れる人にも京都の品格や魅力を実感できる取組の推進」を加え，観光や文化の担い手の育成に税収を使えるように，という点をこだわった。担い手を育てないと持続可能な取組にならないという考えだ。

例えば，文化の継承という点から，宿泊税を財源にして，子どもたちの伝統文化体験の充実に取り組むこともできる。本取組が，将来の茶道人口増加，着物を着る人口の増加などのきっかけ作りとなり，ひいては伝統産業の振興となり，将来の京都のまちが元気になってくるということに繋がる。

京都は，全校で伝統文化体験を実施しているが，一部の学年での実施に留まるなど全児童生徒に体験してもらえているわけではない。これまでの水準を超えて取り組んでみてもいいかもしれない。一気に実現できなくても３年間や５年間の計画で実施できれば素晴らしいと思う。過去には，生き方探究・チャレンジ体験事業や花背山の家・みさきの家の宿泊学習の全校実施を実現してきた実績があるので，次に取り組むテーマとして良いのではないかと思う。

【笹岡 教育委員】

モデルケースとして，まずは京都が実践をして，それを文化庁や文部科学省が注目し，全国に広がればと思う。

【門川 市長】

グローバル化が進む時代の中で，外国で活躍している日本人を見た現地の人が，「あの人は少し所作や発言が違うな。子どもの時に京都で育っているんだ，さすがだ。」と感じてもらえたら嬉しい。道徳教育のための時間も重要だが，茶道を学ぶ際に道徳的な学びも得られると思う。例えば，中学校２年生は，茶道を通して，道徳を学ぶという取組は面白いのではないか。茶道の理念などを学ぶ中で，いじめの解消につながればと思う。

【笹岡 教育委員】

市長がおっしゃったとおり，道徳の中に文化が入るのは面白い。

【在田 教育長】
今，市長から具体的な提案があったが，下京中学校では年１回，全員が浴衣の着付けを体験する日を設けており，長年取り組んでいただいている。一挙にはできないが，拠点校を作って広げていくなど方策はある。生徒も喜ぶし，そこから本格的な着物の着付けというのを学ぶ機会になる。家庭科で浴衣を縫うという授業を行っている学校もある。どう具体的に広げていくか，教育委員会で議論させていただきたい。

【教育委員会事務局　佐藤 総合教育センター所長・指導部長】
中学校家庭科の中で学んでおり，主に着付け体験，着る体験が多いが，実際に作る学校もある。

【門川 市長】
私の妻は，学校で習っていたため，今でも，孫の浴衣も大人の浴衣も全部自分で作っている。実生活に生きる「文化」を学校教育の中で，もっと教えていけたらよいと思う。

【在田 教育長】
文化についての意見交換はここで一旦区切らせていただき，次に，２０３０年以降を見据えてグローバル化・ＡＩ時代に生きる子どもたちをどう育むのかという部分について，御意見をお願いしたい。

【鈴木 教育委員】
２年前から人工知能の研究センターが理化学研究所の中に設立され，人工知能の時代に人が生きる道について研究するプロジェクトを展開している。今日のお話を聞いていて思ったのは，科学技術やモノづくりが成熟して文化になり，それが生活に溶け込んで，私たちの知恵になっているということ。こういった視点を京都モデルとして本市の教育の中に組み込んでいけないか。
今日のテーマは学習指導要領のその先ということだが，プログラミングを学ぶと同時に未来の社会や人間の役割を考えるといったような，文理を超えた学びが両輪となるような教育を京都から作っていけたらと思う。
科学技術について学んだことが，やがて文化に繋がっていくと気付くような力を未来デザイン力として捉え，そういう視点を産官学連携の場面や，学校運営協議会などとも関わりながら，教科学習や体験型学習として学んでいくといった形が作れないかなと思う。
私の研究室の学生が，西京高校で教育実習をさせていただくことになり，先日，学校に伺った。そこで校長先生からエンタープライズ科について御紹介いただき，「本校では，どの国へ行き，何について交流し，何を学ぶかまで生徒自身がデザインしていくことを大切にしている。生徒にとっては大変だし，先生にとっての心配事は増えるが，自分で問題を

発見して解いていくという学び方がこれからの時代の学習の形だと考えている。」と聞き，とても面白いと思った。未来デザイン力を文化力として考えていくと，おそらく科学技術も文化だ，というわざの学びに繋がっていくきっかけになると思う。

【門川 市長】
良いお話だ。当時，エンタープライズ科という名前については，教育委員会でも賛否両論だったが，先見性があった良い名前だったということか。

【在田 教育長】
課題を発見して自分で解決する力をつけていくということを御提示いただいた。少し視点を変えて，未来における多様性，ダイバーシティというキーワードもある。公立学校には，様々な環境の子どもたちが共に学んでいる特性を生かして，子どもたちに多様性への理解を深めるという大きな役割や使命があると私は思っている。それについて何か御意見をいただければと思う。

【奥野 教育委員】
ダイバーシティとは，要は多様性を認める，色々な違いを認めることのできる社会という意味だと私は理解している。多様性といっても様々だが，２０年前に合宿でスペインに行ったとき，足のつかない深いプールで泳いでいたら，両足のない方が，１人で車いすに乗って来られてプールサイドに車いすを置いて，１人でプールに入って，１人で手だけで泳いで帰っていかれた。それを見たときに，凄い衝撃を受けた。相当前だがヨーロッパでは普通にある光景だった。日本でも東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え，ダイバーシティという言葉も普通に使われるようになってきて，障害を持った人，病気を持った人，貧しい子どもたち，様々な人たちが多様性を持って生きていける，チャレンジできる社会を作っていこうとようやく言われるようになった。
私の子どもは公立学校でお世話になっていて，学校を選ぶときに私学という選択もあったが，教育長がおっしゃったように，色々な環境の中で育っている子どもたちを子どもの時から見ていく，接していくことで大きな学びがたくさんあると考え，公立にした。
実際，学校で，先生が多様な子どもたちにどう介入し，またどう見守るか，その辺りのさじ加減で子どもがどう多様性を理解するのかということがとても大事だと思う。
海外の私立学校では，多様性を学ぶために留学に行かせるということをしていて，素晴らしいことだと思う。公立学校でも京都は，海外からたくさん来てくれる街なので，その利点を生かして海外の生徒との交流をもっと積極的にするべきだと思う。そう思ったのは，京都は海外からのお客さんがありがたいことに増えているが，逆にその方たちが京都の街を歩いているときに，日本人がどれだけコミュニケーションを取れているだろうか，と考えたからだ。子どもたちが自分なりのおもてなしを，来てくださったお客さんに自然にふ

るまえるようになることが教育だと思う。それを学校教育の中にどのくらい落とし込めるかということも喫緊に考えるべき課題だと思っている。

東京オリンピック・パラリンピックに向けて日本に来るお客さんが増えている。もしかしたら，人生１回きりの日本の旅かもしれない。その時にどんな人と触れあうかというのがその人の人生にとって大きなものとなって残るだろうし，その時，日本人の子どもと出会って親切に接してもらった，京都市のおもてなしに触れて感動したと思ってもらえたら，滞在中に他のことで多少困っても，良い思い出として残るのではないかと思う。今は，東京オリンピック・パラリンピックを前におもてなしを身に付ける大きなチャンスではないかと思っている。

英語教育も今課題になっていて，京都の小学校では，新学習指導要領を先行して実施しているが，その中で受け身に学ぶのではなく，京都市に住んでいて，自分たちができる英語ってなんだろうと，子どもたちに考えてもらうのも文化を基軸にした学びとして大事だと思う。華道であったり茶道であったり文化というのを英語で考える，そしてそれを海外の人に発信することによって，京都の文化を外に発信する担い手にもなれると思う。そういう子どもたちを教えて育てる人は大変かもしれないが，子どもたちが自らの力で考えて切り拓いていくことが，ダイバーシティの１つではないかと考えている。

そのためには，大変だと思うが，先生方がダイバーシティをどう捉えて，日々の学校行事・学校業務に落とし込んでいかれるのかということだと思う。例えば長期休暇を取得して，外の世界を見て帰ってきてそれを授業に生かす等，京都の中だけで完結するのではなく，もっと広い視野に立った研修を積んで，それを子どもたちに還元してほしいと思う。外に出てみないと京都の良さは分からない。私も海外遠征に何度も行って，京都に住んでいると言ったら海外の方から良い街ですねと言われて，京都は凄いと再認識した。内向きな若者が多いと言われる中，今の子どもたちにはどんどん外に視野を広げていく教育をしていただきたいと思う。

【在田 教育長】

京都の高校生は，視野を外に向けた活動を非常に頑張ってくれている。生徒が自ら留学先を選んで長期・短期留学の立候補をする「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ」という文部科学省の事業があり，全国で２０００人応募して５００人程が選抜されているが，選抜率は京都の市立高校が１番高く，１１人選抜していただいている。

奥野委員が話されたスペインでのプールの話は印象的だったが，そのことに関連して，先日，ダウン症の書家・金澤翔子さんの母親の講演会に参加した。その時にお話しされていたのは，翔子さんは小学校３年生まで普通学級に在籍していたが，４年生から育成学級に行ってくださいと言われて凄く心配したと。しかし，子どもは喜んで学校に通っていた。ある時，担任の先生に御迷惑はないかと尋ねると，「翔子ちゃんが居るから子どもたちが優しくなれる，ほかの子ども達のことを気にかけてくれて，クラスの雰囲気が凄く良くなっ

た」と答えてくれたと。若い女の先生だったとおっしゃっていたが，その先生も感性が素晴らしいと思うし，奥野委員がおっしゃったように，先生がどう受けとめて子どもたちにどう発信するかということが大事だと思う。

【門川 市長】

京都の優れた文化人・職人をいかに学校に取り込み地域と一緒になるかということと，１万人に到達した留学生をはじめ，京都に来ている多くの外国人と子どもたちとの交流については．京都の強みだろうと言っていただいた。また，もう１つの強みに，人口の１割が大学生であるということもある。

ヨーロッパのとある市長に「京都市長，あなたには仕事がないでしょう」と言われたことがある。「治安がいい，街が美しい，安全，教育も文化も素晴らしい，そして大学がたくさんある，素晴らしい企業がある，観光客がいっぱいだ」「世界中の市長がそれを求めて悪戦苦闘している」と。そう言われれば，その通りで，この贅沢な環境を子どもの育ちや市民生活にしっかり活かせているかという視点が重要である。

東京には外国人が非常に多いが，生活圏の中にはそれほど外国人がいない。それに対して，京都には生活圏の中に世界中の人が当たり前にいる。コミュニケーションができていないとしたら勿体ない。京都でも５・６年前までは，観光地にしか居なかったのではないか。例えばフランスからの宿泊客数は，平成２４年は２万７０００人であったのが，去年は１１万人まで伸びており，まちがフランス語で溢れている。イタリアからは，３年前には３万３０００人であったのが昨年度は８万人。京都にはミラノよりも，イタリア料理のレストランが増えたという話も聞いた。まさにダイバーシティのまちである。

【在田 教育長】

「恵まれた環境にいる」とまず認識することが必要である。京都に住んでいると当たり前に思ってしまう。

【鈴木 教育委員】

「観光」という字は光を観ると書く。京都に来た方たちは，自分の人生の中に光を見つけに来てくれていると感じる。観光の持っている人間にとっての意味のようなものを，京都の子どもたちにも感じてもらえたらと思う。

【笹岡 教育委員】

子どもたちが笑顔でいるだけで，そのまちの印象は全然違ってくる。２０年程前に中南米を訪れた時，メキシコでピラミッドに登っていたら子どもたちが非常に積極的に笑顔で話しかけてくれたし，グアテマラでは，ホストファミリーの小学校低学年くらいの女の子が，言葉ではなくジェスチャーでたくさん話しかけてきてくれた。京都の子どもたちもそ

ういうおもてなしの達人になってくれたら素敵だと思うし，英語ができればもちろんいいが，何よりもてなすという気持ちをアピールできればいいと思う。

【在田 教育長】
続いて，３つ目の切り口である働き方改革について，話を進めたい。先ほど，奥野委員からも教員の長期休暇についての御提案があったが，今，学校現場は大変厳しい状況で，新聞等で連日報道されているところである。その一方で，大量退職，大量採用の時代がまだ続いており，本市でもここ数年，３００人規模の採用を行っている。これまでの議論を実践に移していくのは現場の先生方であり，良い人材を先生に迎え，また学校が魅力ある職場であり続けなければならないと思っている。そうした点についても御意見をいただきたい。

【髙乘 教育委員】
学校現場はいつの時代も大変だが，以前は学校がカバーする必要のなかった課題まで次々に持ち込まれているのが現実だと思う。そうした中で，教員以外の肩書・役割を持った方々に仕事を分担していただくという仕組み作りも進んでおり，先生だけで学校の仕事をするというイメージは随分変わってきた。今後，先生方固有の職能として担当する分野がある一方，教員以外で担当できる分野は教員以外に担っていただくということを更に進めていく必要がある。これは人的なサポートであり，財政的な支援を市にお願いしたい。本市が他都市に先んじて，体制の充実が進めばいいと常々思っている。

【在田 教育長】
現場の先生方には余裕がない。先生は生涯学び続ける仕事であるべきだが，とある統計では，教育関係の本を年間１冊も読まないという教員が６割を占めており，１日の読書量も新聞に目を通すのも数分しかないという統計もある。中でも若い先生は読書量が少なく，教員に自分で勉強してもらう時間を意図的に作っていく必要があると思う。
今年度から，先生方の事務仕事をサポートする校務支援員の配置に予算措置をいただき３６校園に配置するとともに，特に中・高で先生方の負担になっている部活動に関して，部活動指導員を５０人配置する予算の措置もしていただいている。いずれも学校現場からは大変好評である。まだ一部の学校での配置にとどまっているので，財政状況を考慮しながら，できるだけ早い時期に全校配置を実現したいと考えている。

【門川 市長】
条件整備についてはしっかり意見交換し，引き続き努力したい。それと同時に思うことは，私自身の反省も含めてだが，これまではすべてを学校が引き受けてきた。今後は地域力を生かして，学校がこれまでかぶりすぎたものを切り離していくことも必要になってく

る。

【在田 教育長】
学校運営協議会がうまく機能し，そういったコーディネート役をしていただいているケースもある。

【門川 市長】
今後そのような成功例を広げていければいいと思う。

【髙乘 教育委員】
子どもにとって大事なのは，成長の過程で自治的な能力を高める，自立する力を強めるということだと思う。これは本来学校だけが担うべき役割ではなく，かつては地域社会で子ども会，地蔵盆など地域のおじさん・おばさん達が子どもたちを盛り立てて主人公にしながら，色々な取り組みをされていた時代があったが，それらもだんだん姿を消してきて，異年齢の子どもたちが一緒になって活動する機会が薄れてきた。その分，学校にしわ寄せが来ている。子どもたちを中心に，子どもたちが自主的・自律的に活動できるような場を地域の中にどう作り直していくのか，というのも大事である。

【門川 市長】
多くの団体で高齢化が進んでいるという話や，ＰＴＡはほぼ全員入っているけど自治会は３割が入っていないという話もあるが，明治１５０年を機に，もう一度考え直していかなければいけない。新しい学習指導要領でも示されている「新しい公共」の考え方にも連なる議論である。「どんな子どもを育てるのか」「育てる主体は地域であり，親であり，学校である」といったことを学校運営協議会等で，地域と一緒に議論できたらいいと思う。

【星川 教育委員】
学校が担うべき仕事を整理していかないと地域自身も高まっていかないので，本来地域が担うべきことは，家庭や地域に戻していくことも考えなければならない。
また，数年前に，文部科学省は教職員の定数改善をしようとしたが，財政上の理由により頓挫してしまった。現在は，スクールカウンセラー・校務支援員等の専門スタッフの配置により，体制は強化されつつあるが，ＯＥＣＤ加盟国の中で，日本の教育への公的支出は最下位。もう一度，定数改善について国として本気で議論していく必要がある。京都市では，独自で小学校低学年で３５人学級，中学校３年では３０人学級を実施しているが，こうした取組が全国にも広がっていけばよい。
最後に，子どもたちに身につけてもらいたい力についてだが，人間が生きていく中で１番大事なことは夢・目標をもつこと。自信をなくしている子，不登校の子，いじめで死に

たいと思っている子もいるが，一人一人の子に希望や夢を持たせ，学ぶ意欲を育むことが教育の原点であり，どんな時代になってもそれ以上のことはない。そして，京都市教育委員会では，「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という理念を掲げ，様々な教育施策を実施してきた。今後もぶれずに続けていただけたらありがたいと思う。

（３）閉会

【村上 副市長】
虐待といじめで命を失う子ども達をどうしたらなくせるかということを日々考えている。経済的な貧困も要因の一つだが，親のネグレクトなど人間関係の貧困が大きく関係している。今日色々話を聞いて，文化・スポーツには，人を差別しないとか，自分を大事にして人も大事にするという力もある。こうした力をうまく生かしていけたらいいと思う。今後とも，子ども若者はぐくみ局と教育委員会と共に考えていきたい。

【藤原 総合企画局長】
京都の教育が他とは違うことを示していくには，文化は非常に重要な要素。市長も常々言われているが，一部の方だけが伝統文化体験を担うのではなく，まったく余裕がないカリキュラムの中ではあるが，全生徒が経験できればいいと思うし，是非，教育委員会でも御検討いただきたい。それが，将来の京都の都市格・文化力の向上に繋がると思う。

【久保 子ども若者はぐくみ局長】
子どもたちには，自ら「気づき，調べ，考える力」をつけさせたいとの話があったが，学校で子どもたちが目指すところと我々職員が目指すところは重なる部分も多い。自分たちから変わっていき子どもたちの支援ができればいいなと思う。

【在田 教育長】
本日の議論により，子どもたちへの伝統文化体験をどのように充実していくか，先生方に，より生きがい・働きがいをもって仕事をしてもらうためにはどうしたらよいか，家庭地域との連携など様々な課題が浮き彫りになった。その１つ１つを教育委員会の中で議論し対応してまいりたい。
本日のテーマは「２０３０年の社会に向けて子どもたちをどう育むか」ということだが，これまでの知識詰め込み型の教育は時代遅れ。自ら考え，創造性を持ち，豊かな表現力で発信できるような子どもを育んでいかなければならない。その中で，京都の文化力は大きな役割を担っていく。
少し宣伝させていただくが，小学校６年生に配置していた専科教員を今年度から５年生にも拡大した。中学校の免許を持った先生が小学校に教えに行っていただいており，現場

からも好評。また，働き方改革のメニューの一つでもある。
最後に，今後とも，子どもたちに豊かな文化力をつけながら，生きる力を育んでいかなければいけないと思う。本日はありがとうございました。

【門川 市長】
全ての子どもたちに伝統文化体験という話題があったが，京都には，伝統文化に従事してきた職人，文化人，１０００年を超えて伝わる本物がある。子どもたちが「ほんもの」に触れることで，夢や希望をもつことにつながり，京都の文化の継承につながる。また近年，子どもの貧困も課題となっており，地域力を生かしながら，政策も充実させて対応していく必要がある。
子育て施策については，昨年，「子ども若者はぐくみ局」を創設するとともに，区役所に「子どもはぐくみ室」を作り，一人一人の職員が子育てコンシェルジュの役割を果たすべく，研修を重ねている。国では，幼児教育の無償化等，様々な議論がされており，子育て・教育にはお金をかけていくことが大切という流れになってきている。
また，子どもにとって最大の教育環境は教師である。教師がゆとりを持ち，自己研鑽し，専門性を高めていくことが１番大事。そのためには，定数改善も大きな世論にしていかなければならない。世間では，少し前まで子どもに関わる問題の責任は，全て学校や教師に押し付けられてきた。しかし，教育現場の過酷な現状が世間に注目され，教職員の働き方改革の必要性が浸透しつつある。非常に良いことだと思うし，我々も努力していきたい。
余談だが，京都市では，平成１８年度に全普通教室にクーラーを設置した。京都議定書誕生の地でもあることから，多くの批判もあったが，これだけの猛暑が続いている。やれるときにやっておいてよかった。
最後に，少子化対策を真剣にやらないといけない。加藤厚生労働大臣は「保育所待機児童ゼロ」を達成することが国の当面の最大の課題と言っていた。これを実現すれば，少子化に歯止めがかかると考えているとのこと。しかし，京都市では，５年連続保育所待機児童ゼロを実現したが，少子化に歯止めがかかっていない。伝統ある素晴らしい東山区の保育所でも，少し立地が不便だと，定員割れが起きている。これが現実。
子育てがしんどい，子どもを産み・育てることがリスクだと考える方もいる。子どもを育てる喜び，子どもがいる社会の素晴らしさ，そういうものを皆が再認識し，若い人が希望を持って行動できるよう最大限の努力をしたい。以前，ある小学校の３０代～４０代の先生方１０人が，夏休みに１週間の旅行をされた際，「ご家族はいいのですか？」と聞いたら全員独身だった。結婚せずに，一生懸命仕事をする方が現場では多い。働き方改革は生き方改革であり，先生方には仕事も家庭も大事にした働き方のモデルを作ってほしい。